

中山門の風景

中山門は第六師団麾下の歩兵第三十五連隊（富山市・富士井末吉大佐）が一番乗りを果たした。

富士井部隊は、十三日午前三時半、夜襲のため進発、まず将校斥候せつこうを出して敵情を確認、夜明けとともに、中隊長は、小出中尉に部下をともなつて中山門左側三〇〇メートルの破壊口に突入すべしと命じた。一方尖兵せんべい数名は中山門の門扉の上部に直径二尺くらいの穴があつたのでその穴をくぐり、ザラザラツと門の内側の地底まですべり落ちた。そこには数人の敵兵がいた。二、三を刺殺、他はあわてて逃走した。小出中尉の指揮する小隊は、中山門左側破壊壁をよじ登り、城壁を占領した。時に五時三十分。中隊主力が中山門を占拠したのは六時十分。連隊本部が入城したのは十一時三十分である。

以下は第三十五連隊第三中隊長清水貞信氏の証言である。

「城壁上からみると、目の前に飛行場があり、逃げおくれた敵が見える。午前八時ころになると友軍が続々入城してくるが、見知らぬ部隊の兵である。

命令により、中隊は再び尖兵となつて市内の掃蕩に進発し、まず飛行場を占領し

たが、敵兵はすでに退散していなかった。中隊は、格納庫を本陣として、広い飛行場の建物を一つ一つ点検し、さらにクリークの向こう側の市内へと掃蕩の手を伸ばした。そして、クリークを渡った向う側の街で十三日の夜を迎えた。

その夜は、部隊命令で民家に宿営したが、各方面と連絡をとり、警戒部署を定めて、やっと午後十時すぎに夕食をとった。

このとき、約一〇〇メートル離れた工場らしい建物の中に、敵兵が数百名かくれているとの報告があった。それと、その工場らしい建物を包囲して、闇の中で掃蕩をはじめた。敵は手榴弾を盛んに投げってきたが、それも次第におさまり、三十分後には全く沈静した。敵兵はほとんど逃亡したが、人数は八〇名ぐらいであった。

その建物を調べてみると、敵の薪炭しんたん補給所であることが判明した。暗闇のなかでよくわからないが、木炭がぎっしり詰まった倉庫があった。盗まれないように封印して、その夜は皆ぐっすり眠った。

明くれば十四日、前日に引き続き城内掃蕩を行ったが、各隊の顔は見違えるように生き生きとしている。

その日の夕方から夜にかけて、掃蕩洩れの敗残兵が苦しまぎれに放火しだした。これには、さすがの勇士たちも東奔西走、消火にへトへトになった。(夜中の) 十二時過ぎ、やっと一段落して寝ようとしているところへ、また情報が入った。

『敗残兵が薪炭倉庫に放火、目下盛んに燃焼中』というのである。ただちに、中隊長自ら指揮して消火にあたったが、火の手が早くて寄りつかれず、全焼するという事件があった」（『南京戦史』(7)のこの証言内容とほぼ同じことが、清水貞信著『ひげ中尉と南京、徐州、武漢戦』の中にある。同著は昭和十六年九月十五日発行「富山県立図書館蔵」。

なお、第三十五連隊第二中隊本部書記軍曹野村敏則氏は、この清水隊長の証言に対して次のようにコメントしている。

「清水中隊長の城内掃蕩記録は、素っ気ない記録のように思われるかも知れないが、当時私が大隊書記として第一線中隊から受けた感触もこの程度のものであった。逃げおくれた敗残兵は、便衣に着がえて難民区にもぐり込んだものと思われる」（『南京戦史』(7)。

この三十五連隊（富士井部隊）よりやや遅れて中山門から入場した歩兵第二十連隊第一大隊第四中隊の衣川武一氏（上等兵）は、筆者への書簡でこう述べている。

「……十三日午前七時ころ突入しました。突入と云ったところが中山門は二重、三重に土嚢を積みあげ、門扉の上部に人間がどうにかくぐれるほどの隙すきがあり、そこをくぐって入った。住民はテーブルを出してお茶の接待です。拍子抜けの変わりようです。城内は死体も見ず、むしろ清潔に見え、道路は坦々と白く続き、何か気味悪

い感じでした」

十三日正午ごろ「みやこ新聞」の従軍記者小池秋羊氏が中山門から入場している。氏は筆者と対談のあと、筆者に次のような手記を寄せられた。

「正午ちかくなつて、やつと中山門の鉄の巨大な扉が開いた。扉の裏側、つまり城内側には何千袋という麻袋マキタイの土嚢がぎっしり積みあげられていて、日本軍の砲撃にビクともしなかつたようである。逃げ遅れた中国兵の捕虜たちを混えて、兵隊が土嚢の取り除き作業をやっていた。……昨日まで自分の陣地であつたこの城内の破壊作業を黙々とやらされていた。この心境はどんなであろうか。(中略)」

小池氏は城内深く入つて行つた時の感想を次のように述べている。

「首都は、西北角の難民区と旗を掲げた一区画を除いて、全市人ツ子ひとり居ない。『死の町』に化していた。不思議なことに、城外は酸鼻をきわめた破壊の跡であるにもかかわらず、城内は整然としていて、あまり破壊された形跡も見当らず、道には屍体一つ発見されなかつた。——これが昨日までの激戦を交えた戦場の跡かと疑わせるほどの、清潔にさえ見える静かな沈黙の街であつた。少なくとも私の第一印象は、中山路に関するかぎりそうであつた。城外ではまだ流血の生ま温ささえ感じさせる戦禍の跡であるのにひきかえ、街は凍るような静寂さが沈黙の秩序をもって守られていた。(後略)」

以上見てきたように、中華門、光華門、中山門など、南方の諸門を攻略して、十三日に入城した日本の将兵や従軍記者が見た南京市街の光景は、無気味なほど静まり返った森閑たるものであった。屍骸も殆んど見かけず、人ツ子一人いない状況であった。しかるにこれが、東京裁判の檢察側証人や、洞氏はじめ大虐殺派の引用する文献や主張となると、この狭い城内に一万二〇〇〇人の死体が横たわり、累々たる死体は山をなし、血は河をなして膝を没するほどで、加えて日本兵は人を見れば殺し、女とみれば強姦し、物を見れば掠奪し、家を見れば放火し、悪魔のような所業が十三日から六週間連続したということになるのである。

読者は、いずれに信をおかれるや、多言を要すまい。

難民区の掃蕩

難民の蝟集する安全区および外国権益が数多く存在する地域を担当した第九師団の掃蕩隊長秋山第六旅団長は、掃蕩にさきだつて、次のような詳細な注意事項を下達している。

次の通りである。